

# ポストコロナ期における効果的な ハイブリッド型授業の実施に向けた一考察

## — 教育実習事前事後指導における 「ツーオペレーションハイブリッド型授業」の実践報告 —

染 谷 雅 広

桜美林大学健康福祉学群

A Study for Effective Hybrid Classes in the Post-COVID-19 Period  
-Practical report of two-operation Hybrid Classes in pre- and post-teaching training-

SOMEYA Masahiro

College of Health and Welfare, J. F. Oberlin University

キーワード：ハイブリッド型授業、学びの質、多様な学び、  
リカレント教育

### 1. はじめに

我々のあらゆる生活やこれまでの常識を一変させた新型コロナウイルス症 COVID-19（以下、本稿では「新型コロナウイルス」とし、時期と合わせて表記するものは「コロナ期前」「コロナ禍」「ポストコロナ」などとする）は、大学等においても大きな旋風を巻き起こした。特に、「オンライン授業」「ハイブリッド型授業」の言葉が象徴するように、ICTを活用した授業が教員の意思とは無関係に、否応無く必要とされ、およそ2年の歳月が経った今では、新しい授業形態となりつつある。また、新型コロナウイルスは少子化をも加速させた。大学等がこれまでの学生数を確保するには、リカレント教育の拡充も視野に、社会人学生のニーズなどを踏まえた授業の提供方法が求められる。

一方で、新型コロナウイルスが与えた影響は、決して悲観的なものばかりではない。教員にとっては既存の授業の在り方を見直す転機となり、今までに想像もしなかったあらゆる方法を知り、教員自身が積極的に新しい方法を取り入れることで、学生の学びの質の保証・向上に寄与し、結果として前記した社会人学生への新たな授業提供なども含め、多様

な学びを支えるための示唆を得るまでに至っている。

以上のように、大学等は、新型コロナウイルスの影響を受け、様々な観点から変革期を迎えていると言っても過言ではない。その変革期をより良いものにしていくためには、コロナ禍で創意工夫してきたオンライン授業やハイブリッド型授業の実践を丁寧振り返り、その成果と課題を明確にした上で、ポストコロナ期における新たな授業展開を模索していく必要がある。本稿では、はじめに「コロナ期前」「コロナ禍」における大学の取り組みを概観し、次に「ハイブリッド」という言葉及びその取り扱い方を整理する。その上で、筆者が試みた「ツーオペレーションハイブリッド型授業」の実践報告を行い、その成果と課題を明確にし、「ポストコロナ期」の大学等の教育・授業における今後の展望について考察を加えることとした。なお、「オンライン授業」の他に「遠隔授業」という言葉も用いられるが、本稿では一部の箇所を除き、インターネット等を活用した授業を「オンライン授業」という言葉で統一する。

## 2. コロナ期前及びコロナ禍における大学等の教育・授業の現状

まず、現在に至るまでの大学等のオンライン授業、ICT活用等に関する動向を、「コロナ期前」「コロナ禍」に分けて概観する。

### (1) コロナ期前の大学等の教育・授業の現状

新型コロナウイルスの影響により、大学等のオンライン授業は急激な進展を遂げた。一方で、一部の通学制課程大学等では、新型コロナウイルスが流行する前（以下、コロナ期前とする）から授業のオンライン化に取り組んでいる。制度的には、1998年3月に改訂された大学設置基準により、通学制課程においても遠隔授業<sup>1</sup>が認められるようになった。また、2001年に改訂された大学設置基準では、インターネット等を活用するオンデマンド型授業も遠隔授業として認められた。ところが、大学等において遠隔授業の普及はそれほど進むことはなく、文部科学省（2017）の調査によると、遠隔授業を実施している大学は193校（短期大学、大学院大学を除く国公立大学の25.9%）にとどまっていた。

### (2) コロナ禍の大学等の教育・授業の現状

コロナ禍という言葉は、2019年の年末から新型コロナウイルス感染症の流行による災難や危機的状況を指す言葉として普及した。実際には、2019年12月初旬に中国の武漢市で第1例目の感染者が報告された。わが国では2020年1月15日に最初の感染者が確認され、3月下旬以降感染者数が急増した。その頃からコロナ禍という言葉が新聞やネット上に多用された。以上を踏まえ、本稿では新型コロナウイルスの影響を大きく受けた時期をコロナ禍とし、本稿が大学等の授業を取り扱う内容に鑑みて、以後に述べるコロナ禍を2020年4月～本投稿時までとする。

コロナ禍で開始された2020年度、大学等の多くは想定外の事態となった。文部科学省（2020a）が調査した大学等の対応状況の結果によると、2020年4月10日時点で授業開始

の延期を決定・検討している大学等は85.8%、開始時期は例年通りだが遠隔授業を実施・検討している大学等は11.2%、例年通り授業を実施している大学等は2.3%であった(図1)。また、同調査の質問「遠隔授業の活用に関する検討状況」に対して、遠隔授業を実施すると回答した大学等が47.4

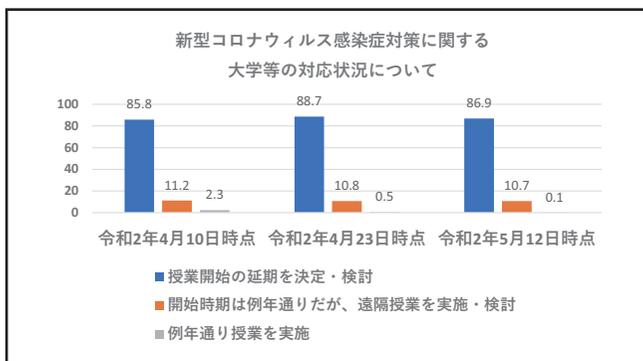


図1 文部科学省の調査結果(2020a)をもとに筆者作成

%、検討中と回答した大学等が37.0%、実施予定はないと回答した大学等が11.0%であった。コロナ禍初期の段階においては、まずは授業を延期し、その間に授業のオンライン化、ICT活用が急速に進められた大学等が大半を占めている状況が推察できる。

その後、緊急事態宣言が解除(全国としては2020年5月25日)してからは、大学等の授業実施状況が一変した。文部科学省(2020b)が調査した大学等の授業実施状況の結果によると、オンライン授業を行っている大学は90%を超え、対面授業のみを実施している大学等は約10%であった。その後も、感染状況により大学等の対応も大きく左右されつつ、同時に授業のオンライン化、ICT活用は進展していった。その一方で、突貫作業で進められた授業のオンライン化は、様々な課題も浮上した。本稿ではその詳細は省略するが、学生の通信環境、経済的な面でのリソース不足、(学生間・教員間における)ICT活用スキルの差、授業のオンライン化に伴う通信環境の整備、web会議ツールやLMS等の導入コストなどが挙げられる。さらに、前記した課題と相俟って、不完全な状態でオンライン化した大学等の授業に対する不平不満から授業の在り方に対する批判的な意見が飛び交い、学費返還運動も生じ、大学等はその対応にも追われてきた。

コロナ禍から1年が経過した2021年度春になると、前記した様々な課題も整備され、一定の学びの質が担保されたオンライン授業が提供できるようになった。その一方で、文部科学省からは対面授業実施が求められた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大状況が収まらない中で完全なる対面授業の実施は不可

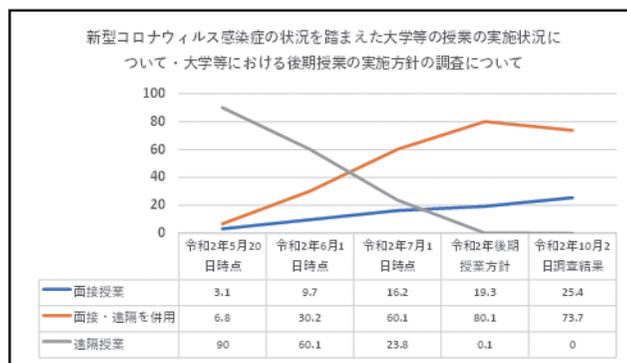


図2: 文部科学省の調査結果を参考に筆者が改変

能と判断する大学等も多く、この頃からハイブリッドという用語が多用され、対面授業とオンラインでの取組が進められるようになった(図2)。

### 3. ハイブリッド型授業とは

大学等で取り扱うハイブリッドは様々なため、まずはハイブリッドの用語等を概括する。広辞苑第七版によると、ハイブリッドは「異種のを組み合わせたもの」を意味している。また、コロナ禍で大学等の授業に用いられるようになったのは、文部科学省の2020年8月の会見にて文部科学大臣が大学へ「オンラインと対面のハイブリッドな授業」を求められて以降多用されてきた。以上を踏まえると「対面での授業に様々な方法でオンラインでの取り組みを組み合わせたもの」がハイブリッド型授業と呼ばれるようになり、その授業形態は<ハイフレックス型><ブレンド型><分散型>の3つに分類される。

#### <ハイフレックス型>

学生が同じ内容の授業を、オンラインでも対面でも受講できる方式。担当する教員は対面で授業を行いながら、web会議ツール等を用いて同時双方向型のオンライン授業も可能とする。学生は対面での参加かオンラインでの参加のどちらかを選択して受講する。※ただし、人数制限を設けているなどの理由で、必ずしも学生が選択できるとは限らない。

#### <ブレンド型(又はブレンデット型)>

授業の内容に応じて、対面で行う場合とオンラインで行う場合を組み合わせる授業を実施する。例えば、初回は対面で実施し、中盤はオンラインで実施、演習的な内容では対面で実施などの方法がある。

#### <分散型>

受講生を2つ分け、半分の学生は対面授業、残りの半分の学生はオンライン授業(オンデマンド型又は別教員による同時双方向型など)を実施する。次の回ではそれを入れ替えて実施する。実験や実習などの少数での対面参加が望ましい場合の方法として実施される。

上記に示した3つの授業形態には、それぞれの特徴や課題があるため、各授業の内容や目的に合わせて選択することが望ましいと考えられる。なお、本稿で後述する授業実践報告のハイブリッド型授業はハイフレックス型の授業形態である。

## 4. ツーオペレーションハイブリッド型授業の実践報告

### (1) ハイブリッド型授業の現状

大学等は、コロナ禍の様々な対応により授業におけるオンライン化・ICT活用を急速に発展させてきたが、ハイブリッド型授業の実施には新たな課題も浮上した。特に大きな課題は、ハイブリッド型授業を円滑に実施する上での教員間のICT活用スキルの差である。

オンライン授業実施当初も、大学等の教員間においてICT活用の格差が生じたが、教職員間での連携・協力等により、少しずつその格差は縮まりを見せてきた。ところが、ハイブリッド型授業はそのオンライン授業よりも更なるICT活用スキルを要する。講義形式の授業であればこれまでのオンライン授業の手順とそれほど変わらないが、演習形式の授業ではそうはいかない。特に、グループワーク等を対面の学生とオンラインの学生ともに行う際は、そのグループ分けや発表の仕方等に相応の操作スキルが求められる。結果として、ハイブリッド型授業を実施した教員からは、「オンラインでの受講者がただ様子を見ているだけの時間が出てしまう」「(オンライン受講者の対応に教員が気を取られて、)対面で受講している学生を待たせてしまうことが多々ある」等の声が聞かれている。つまり、教員への負担が大きい故に、教員によって実施困難な状況や、授業の学びの質を担保できない状態が生じている。そこで筆者は、教員の負担を減らすと同時に、学生の学びの質を確保する方法として「ツーオペレーションハイブリッド型授業」の実施を試みた。

### (2) ツーオペレーションハイブリッド型授業

ツーオペレーションハイブリッド型授業とは、筆者の造語である。昨今、子育てを一人でこなす母親に対して「ワンオペ育児」という言葉を良く耳にする。掃除、洗濯、食事等を一人でこなしていくこと(状態)を、和製英語の「ワンオペレーション」を用いて、「ワンオペ育児」と呼ばれるようになった。科目担当教員が一人でハイブリッド型授業を実施する状態も、まさに「ワンオペ育児」に類似する。ZOOMなどのweb会議ツールを立ち上げ、映像や音声の状況を確認し、出席も対面とオンライン双方を確認、演習授業ではグループワークの設定も行う。このような「ワンオペ授業」では相応のICTスキルが必要とされ、不慣れな教員によっては負担増となるのは明らかである。育児では母親だけでなく父親と協力して二人での実施が求められているように、大学等の授業においても、学生の最善の利益を最優先に考えれば、負荷の高い「ワンオペ授業」よりも主たる教員を支える人のいる授業の方が学生にとってもより良い授業を提供できる。以上を踏まえて、「主担当教員と補助的なスタッフ(教職員等)が一緒になって実施するハイブリッド型授業」をツーオペレーションハイブリッド型授業と呼ぶことにした。

### (3) 授業実践報告

以下、その実践を具体的に報告する。まず、今回実践した授業科目の概要を下記に示す。

- ・科目名：教育実習事前事後指導      ・授業形態：演習
- ・履修者：39名
- ・実践した時期及び回数：2021年5月12日～2021年7月14日までの全8回

なお、本科目は演習科目のため、実習に向けた準備等、教員からの伝達事項も含まれるが、学生同士で意見を共有したり共に考えたりするグループワークの割合が高い。本科目は、長年この科目を担当してきた主担当教員と今年度より新たに担当した筆者の2名で実施しており、2021年4月から対面授業のみで実施していたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、ハイブリッド型授業の申請・実施が認められたため実践を試みることにした。この間、受講する学生は、自らの状況に応じて対面での参加とZOOMを用いたオンラインでの参加の選択を可能とした。その結果、参加状況の内訳は下記の通りとなった。

| ツォオペレーションハイブリッド型授業の受講者の内訳（人） ※当日の欠席者・実習中の学生の数は除く |       |       |       |      |       |       |      |       |
|--|-------|-------|-------|------|-------|-------|------|-------|
|  | 5月12日 | 5月19日 | 5月26日 | 6月2日 | 6月23日 | 6月30日 | 7月7日 | 7月14日 |
| 対面（教室）での受講                                       | 11    | 11    | 11    | 12   | 13    | 18    | 17   | 18    |
| オンライン（ZOOM）での受講                                  | 28    | 24    | 26    | 27   | 23    | 20    | 20   | 19    |

授業内での主な役割分担としては、主担当教員は「原則、対面とほぼ同じ様に実施」してもらい、オンライン参加者の対応を全て筆者（以下、サブ教員とする）が担うこととした。主担当教員が対面の学生対応に専念できるよう、授業開始に先立ちサブ教員が実施した具体的な作業手順は下記の通りである。

※枠内の太字箇所が、本学ハイブリッド授業手順に無い、筆者独自の手順（内容）

- ① サブ教員のノートパソコンと、本学の各教室に常備されているハイブリッドセット（webカメラと三脚）を用意する。
- ② サブ教員のノートパソコンを立ち上げ、web会議ツール（本学ではZOOM）を立ち上げ、サインインする。※本学では、2021年度は全ての教室にバーチャル教室があるため、本科目で割り振られた教室と同じバーチャル教室に入室（サインイン）する。
- ③ webカメラとノートパソコンを接続する（USB端子を使用）。
- ④ webカメラをパソコンに選択し、ノートパソコンもwebカメラの映像に設定する。
- ⑤ webカメラにある音声を使用せず、ノートパソコンの音声調整をし、ノートパソコンから直接教室のマイクの音声を拾えるように設定する。ii
- ⑥ webカメラの位置を授業内容に応じて調整（主担当教員の映る場所と教室全体が映る場所の双方に対応できるように、教室備え付けのパソコン（主担当教員の位置）とは反対側の位置にセットする。
- ⑦ 主担当教員は、教室内のパソコン又は自身のパソコンからZOOMに入る。  
※その際、音声はミュート、パソコンのスピーカーもoff（音量をゼロ）にする。
- ⑧ webカメラをセットしたサブ教員のノートパソコンを「ホスト」にし、主担当教員側のパソコンを「共同ホスト」にする。
- ⑨ 教室備え付けのスクリーンに提示したい資料や参考映像等が映るかの確認を行う。  
※原則、主担当教員のZOOMで画面共有をすることでZOOM参加者と教室での参加者が共有できるようにセットする。  
※難しい場合は、サブ教員が資料を画面共有できるように、資料を共有しておく。
- ⑩ 最終的に音量調整、カメラの位置確認を行い、準備終了の合図を主担当教員へ出す。

授業開始後からは、主担当教員は基本的には教室に参加している学生に向けて教室内のマイクを使用して話す。その間にサブ教員が行う作業としては、

- ① 学生のオンラインでの入室状況を確認、出欠確認の補助（ZOOM参加者の確認）
- ② 学生に録画の許可を得た上で「レコーディング」を開始する。
- ③ オンライン受講者の学生と、チャットを用いながら映像や音声の不具合がないか確認
- ④ オンライン受講者からの質問に対応（必要に応じて、主担当教員へ報告）
- ⑤ グループワーク時「ブレイクアウトルーム」の設定、振り分け対応、グループへの参加
- ⑥ オンライン受講者が発表する際の音声の切り換え・音量調整

などを行った。最後に、授業終了時はサブ教員の方からオンライン受講者へ呼びかけ、何か質問等があればその場で適宜対応をした。その間、主担当教員は対面受講者への質問等

への対応を行った。

#### (4) 実践の結果

実践終了後の主担当教員との振り返り内容も含め、以下に成果と課題を記す。

##### <成果>

- ・対面で参加している学生に専念して授業に臨めた（主担当教員より）。
- ・ICTの活用に不慣れな（又は少し自信のない）教員でも、ある一定のサポートがあればハイブリッド型授業を実施できる。
- ・対面参加者、オンライン参加者双方の授業内容の質を担保することができる。さらに、質の高い授業記録を録画することで、欠席者等に対しても同等の授業内容を提供できる。

##### <課題>

- ・教室の設備によっては、オンライン受講者の発表時に、教室内に適切な音声が入らない。
- ・オムニバス科目以外の授業に、サポートスタッフを配置する人的問題がある。
- ・学生の授業評価アンケート等を通じて、ツーオペレーションハイブリッド型授業実施に関する率直な意見を聞く必要がある。

まず成果について、これまでに述べてきた通りオンライン授業が普及していく中で授業を実施する教員も一定のICT活用スキルは向上してきたが、ハイブリッド型授業の提供となると教員一人で実施するのに困難が生じることもある。その状況下で一人の教員に全てを委ねれば、授業内容の質低下につながり、ひいては学生に不利益を被ることにもなり得る。当面の間は、教員の状況に応じて適切な授業実施の支援を行う必要があり、ツーオペレーションハイブリッド型授業はその一助となる可能性が高い。また、今回実践したツーオペレーションハイブリッド型授業のように、オンラインで受講する学生の学びの質を、対面参加者同等に担保できれば、今後は遠方受講者への対応、海外の学生対応、さらには社会人学生の対応にも寄与し、結果として大学等の志願者増に期待できると考えられる。さらに、今回のようにサブ教員が操作を行った授業記録は、一定の質が担保されているため、欠席者へ配信することで当日参加者と同等の授業内容を提供できる。当然、参加者への同意を得た上で、限定的な配信に努めること、視聴する学生への諸注意事項の伝達を徹底することは不可欠であるが、これにより教員の欠席者対応の負担減にも資する。

一方、課題についても言及する。まず設備面については、コロナ期前からすでに授業のオンライン化を進めてきたことの有無や、大学の規模等による差が大きい。本学においては、令和2年度より全ての教室及び教員研究室のバーチャル対応の整備が進んでいる。しかし、対面授業の際には教室による設備面の差があり、実際オンライン受講者の音声は教室に届かない等の一部不都合が生じた（※なお、本学において、前記課題は実践報告後に改善されている）。もう一つの人的支援・人的資源の面であるが、先述した筆者の授業対応内容からも分かるように、決して高度なICTスキルは必要なく、むしろ主担当教員の

サポート役に徹し、ZOOM等のweb会議ツール操作がある程度できれば、必ずしも教員を配置する必要はない。つまり、今後ツーオペレーションハイブリッド型授業を実施していくにあたり、オムニバス科目でない場合の主担当教員のサポートには、事務職員などの配置も十分可能である。しかし、事務職員の対応も頻度が多くなれば本業に支障をきたしかねない。そこで筆者が最も提案したいのは、大学院生のサポート、TAである。特に、本学のような学園内に大学院生がいる環境であれば実施可能であり、教員の授業を参考にできるという点ではTA側のメリットも大きい。3点目の課題については、新たに試みた授業方法に対して、受講した学生に丁寧に率直な意見を聞き、その内容を反映しながらより良い授業展開となるよう改善していく必要がある。

## 5. おわりに (今後の課題と展望)

コロナ禍からおおよそ2年の歳月を経過した現在、オンラインでの取り組みは大学教育に大きなインパクトを与え、様々な課題を感じながらも授業内容の改善・進展等に期待する声も多い。朝日新聞と河合塾の共同調査(2021)によると、大学教育の今後について学長に尋ねた結果、「教育のDX・ICT活用が進む」「授業改善が進む」に対して90%以上が「そう思う」「ある程度そう思う」と回答している。また、社会人を受け入れやすくなる点についても、「そう思う」「ある程度そう思う」と回答する割合が50%を越えている。一方で、新型コロナウイルスの影響を受け、政府の想定より3年ほど早いスピードで少子化が進んでいると言われる中、大学等は入学者の確保に向けて一層厳しい時代が訪れる。しかし、リカレント教育に対しては一定の需要があり、2018年度に大学や専門学校で学んだ社会人は47万人に達している。以上のことから、新型コロナウイルス感染症に伴い創意工夫されてきた教職員のオンラインでの様々な取り組みは、今後訪れるポストコロナ期において、完全なる対面授業に戻す方向よりも、むしろ如何にオンラインでの取り組みを活用するかに舵を切っていくことが求められるのではないか。今回筆者の実践したツーオペレーションハイブリッド型授業が、より効果的な授業形態、多様な学びを支える方法、リカレント教育の強化など、今後の大学教育及び新しい授業形態の一助になれば幸いである。

### 注

- i ここでは、オンライン授業ではなく、文部科学省が示した通りに〈遠隔授業〉という言葉を用いている。
- ii 具体的には、ZOOM左下の「オーディオ設定」をクリックし、「マイク」の項目内にある「自動で音量を調整」のチェックを外し、極力音量を最大にすることで、教室内の音声を十分に拾うことができる。一方で、ノートパソコン周辺の雑音には注意が必要である。

<参考文献等>

- ・鈴木克明 [2020] 『実践的遠隔授業法』 IDE：現代の高等教育 (623), 27-31.
- ・朝日新聞と河合塾の共同調査『ひらく 日本の大学』 朝日新聞 2021年10月4日朝刊
- ・森田裕介 [2021] 『ポストコロナを見据えた大学授業のデジタル変革』 大学教育と情報 2021年度(1), 5-9.
- ・文部科学省 [2017] 『大学における教育内容等の改革状況について (平成27年度)』  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/1398426.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1398426.htm) (2021年10月25日現在)
- ・文部科学省 [2018] 『リカレント教育の拡充に向けて』  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/043/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2018/08/03/1407795\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/043/siryo/_icsFiles/afieldfile/2018/08/03/1407795_2.pdf) (2021年10月27日現在)
- ・文部科学省 [2020a] 『大学・大学院・高専に関する情報』  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/coronavirus/mext\\_00016.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00016.html) (2021年10月21日現在)
- ・文部科学省 [2020b] 『大学等における後期授業の実施方針等の調査について』  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/activity/detail/2020/20200915\\_01.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/activity/detail/2020/20200915_01.html) (2021年10月21日現在) 染  
症への対策等に係る留意事項について (周知)』  
[https://www.mext.go.jp/content/20210305-mxt\\_kouhou01-000004520-02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210305-mxt_kouhou01-000004520-02.pdf) (2021年10月27日現在)